

第 580 回経済学会例会報告

例会日時 2019 年 3 月 19 日

報告論題 「1862 年第二回ロンドン万国博覧会：忘れられた催し？」

報告者 重富公生

ヴィクトリア時代の繁栄を象徴する催しであった 1851 年のロンドン万博の 11 年後に、同じロンドンを会場とする第二回の万博がイギリスで開催された。この第二回の万博は、会場の規模や展示者数・出品者数・参加国数、そして入場者数で第一回の実績を上回っていたにもかかわらず、第一回の催しとは対照的にこんにち研究対象として取り上げられることはほとんどなく、また、すでに閉会直後から失敗だったという声が寄せられていた。この報告では、第二回ロンドン万博を対象に、その概要と時代的な背景を追い、はたして「忘れられるべき」催しだったのかを再考してみたい。

失敗であったかどうかはともかく、第一回大会ほど輝かしい成果と印象を生まなかった理由はいろいろあり、そのなかには直接催し自体の内容とは無関係なこともあった。第一回大会の実質的な主導者を務め、その成功により俄かに国民的人気が高まっていたアルバート公は第二回の開催にも積極的であったが、開催の前年にチフスで急逝し、イギリス全体にその喪に服する雰囲気は漂っていたこと（開会式での女王の臨席もなかった）。会期は夏を中心とする半年間と設定されたが、この年の夏はとりわけ雨が多い湿った気候だったこと。たしかに入場者数は前回はわずかに上回っていたが、開催経費もかさみ、おおかたの関係者の期待に反して収支の黒字は計上されなかったこと。そしてなによりも大成功の催しとたたえられた水晶宮での第一回の影に隠れてしまったこと。

この二つの万博の時間的隔たりはわずか十年余りであるが、しかし内外で変化の大きな時期でもあった。国内鉄道網のマイル数は延長を続け、海底電信ケーブルがネットワークを広げ、またインドが国王の直轄統治下に置かれた。またクリミア戦争、イタリア独立戦争、そしてアメリカでの南北戦争の勃発といった戦乱の時代でもあった。注目すべきは、イギリスの工業生産能力は引き続き頂点を極めていたという点で、19 世紀後半に展開する、新たな業種を担い手としたいわゆる第二次産業革命につながるような技術革新が、すでにこの時期に本格化しつつあったことである。1862 年の万博はこのような諸面での変化を如実に反映しており、その意味ではやはり時代を映し出し象徴する内容を備えていたといえる。

この報告では、第二回ロンドン万博について、開催までの経緯とその概要を説明し、時代的背景と関わるような展示品のいくつかを紹介する予定である。なお、報告者が 1851 年ロンドン万博の調査をすすめる過程で得られた情報を寄せ木した、いわば研究余滴的な報告であり、体系的・網羅的な研究ではないことを、あらかじめお詫びしておきたい。